三池に来て感じたことの一端

都立大教授　沼田稲次郎

大牟田の街を歩いていると「向坂理論は三池を潰す」という立看板が出ていた。その夕方旅館ではったり向坂先生におめにかかったので、「向坂理論とはどんなものだとして宣伝されているのですか」といってきいてみた。「どうやら大牟田ソビエートを打破てようとする理論だということらしいですよ」との若々しい青教授は大笑される。「向坂理論」をこのようにメーキャップしたのはどうやら「三井理論」のせいらしい。このようにメーキャップされた向坂理論なるものを想定しておいて、その向坂教室の高弟たちが組合を指導しているのだから行きすぎた革命的闘争が展開されているのだという結論に飛躍して、「三池を潰す」という〝批判〟を打出すことになるらしいのである。またこの飛躍的三井理論ともいうべき看板をかかげている大牟田再建市民運動本部というのは、別の看板でも三井資本を代弁しているように思われた。看板は、日本一低能率日本一高賃金の三池炭鉱労働者、だと宣伝している。そのいい分は三井資本のいい方と同じなのだが三池の組合は「日本一」という名誉ある位については証拠をあげて否定している。しかし考えてみるとおかしな事で、低能率かどうかは三井資本にとっては問題だろうが、大牟田市民には知ったこっちやないわけだろうし低能率が本当だとすれば、三池の労務管理の拙劣不合理を暴露するだけのことだが、いわんや高賃金に到っては大牟田市民にとって、ことに運動本部のおかれている商工会議所に集る中小商店にとっては大歓迎すべき事情だというほかはあるまい。日本一高賃金の一万五千世帯の購買力が市民の懐を温めてくれるだろう。この看板は三井に恋ならんとして市民に孝をならざる運動本部の正体を露出しているようで面白い。商店街の人たちが本気にこんな運動をやってるようには思われない。別の看板には、暴力争議を世論で何とかしようと誓いてあったが、静かなる争議団の構えと、バリケードをはったロック・アウトの様相とを対比した市民は暴力とは首切りを押しつけてロック・アウトをした会社の行為のことだと判断するのではあるまいか事実はたしかに首切り、組合切り崩し、ロック・アウトなどをやる資本の方が暴力的だといわざるを得ないだろう。

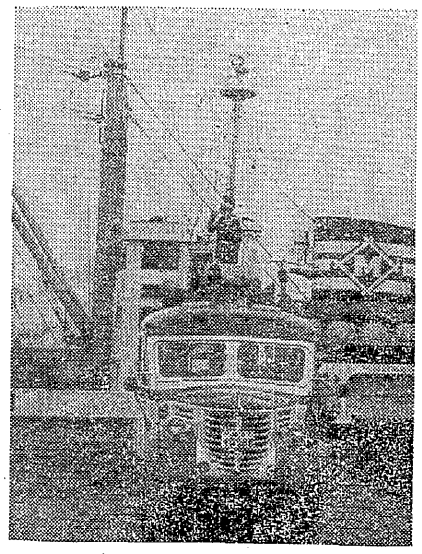
この種の看板が立てられている大牟田駅前附近に着いてから、かれこれ一週間スト地帯を歩いたが争議の様相もいくらかわかったように思う。五、六年前に有名を一一三日の「英雄なき闘争」によって、指名解雇をはねのけたときは毎日のように組合員と主婦とのデモンストレーションの嵐が社宅からまき起つては会社をつつみこんだ。第二次大戦後に発足した日本的組合の弱さを百日の大集団行動によって克服して行ったのである。そして闘争の勝利の後、そのエネルギーを職場におろし、職場の中に自主的な仲間の団結を打ちこんで行った。その職場闘争は前期的な労資関係の上にあぐらをかく職制にとっては〝行きすぎ〟であり〝革命的〟ですらあるようにみえたにちがいない。たしかに職場の中に自主的な組合が根をおろし、それを承認しそれと協議しないでは労働者を使いこなすことができないという体制―これが職場の民主化とか社会化といわれるものだがーは日本的労資関係にとって革命的な改善を意味するものであった。然し職場闘争そのものは経済的な要求をもつ組合活動であり、労資対等を職場で実現する合理的なものであった。ただ威猛高な職制に対しては職場闘争も激しい形になるのも自然なことであったろう。

一一三日の闘争がその後、日鋼室蘭や王子苫小牧の闘争の原型となったように、三池の職場闘争は日本の労働運動に方向を与えたことは否定できない。このような職場闘争は三池労組の体質をきたえて来た。会社側の強引なロック・アウトに対してもじつくり腰をおろして対決できる団結力はすごいと思う。社宅や鉱業所の周辺にみなぎる帯電した静寂は、五年前の連日のデモ旋風よりもはるかに迫力をもつことを感じさせる。三池の闘いは、いま新しい力の段階にきていると思う。そしてこの闘いはまた今後のわが国の大ストライキの原型となるにちがいない。自主的団結を独占資本に承認せしめるか否かをかける闘争の本質を把えて勝利への道を前進していただきたい。

〝スト破りで挑戦〟

港務所揚炭に見せる敵のアセリ

一月二十五日不当ロック・アウトに対決する全面ストに入っていらい、坑内からの石炭搬出はピタリと止まった。ストいらい一カ月をこえ、貯炭はいよいよひっぱくして来た。関連産業各社では必要な石炭を国鉄貨車や貨物船による送炭で確保しなければならなくなったが、九電用石炭貯物船の入港とともに、会社はロック・アウトど、はじめて港務所の揚炭をめぐり団交を申入れて来た。そして、あせった会社はついに第三者による揚炭を強行して来たのである。組合では不当なスト権侵害、スト破りを追及するとともに、現場ではねばり強い説得行動に入ったが、スト破りの揚炭作業は、いらい現在までつづけられている。」



第三者揚炭はスト破り

ロック・アウト一カ月をこえ、関連産業各社の貯炭は、東臣、染料合成、九電あわせて約十二万トン（約一カ月分足らず）になってきた。そのため、関連産業各社はそれぞれ必要な石炭を北海道、関西北九州方面からの買付炭で急場をしのぐため、国鉄貨車や貨物船での送炭で確保しなければならなくなった。

たまたま九電用炭を積んだ大型船六ばい（二万四千トン）の入港により、会社は揚炭問題で団交を申入れ、二十九日午後三時すぎから本社会議室でひらかれた。席上、会社はつぎのような申入れをして来た。

(1)いま三池港に二万四千トン（大型船六ばい）が入港している。殆んどが九電関係のものである港務支部の保安要員による一日千五百トンの揚炭実績では、港船がながびくし「港」という公共性「電力供給」という公共性を失いかねない。

(2)保安要員（出来高制者）のほかに定額給者の人員を一時振職させ、保安要員をふやし、一日二千トンに揚炭をしたい。それでも揚炭が少いので、第三者、関連産業各社の手による揚炭作業もやる。

(3)関連産業各社の貯炭合計は十二万トンで、一カ月の消費量は約四千五百トン（うち九電が壊高三千トン消費）であり、銘柄の関係があるから、一カ月分の貯炭があるとはいえない。

とくに九電は大口使用電力を制限しようとしているくらいなので急いでいる。

虫のいい要求並べる

以上のような全貌であったが「では関連各社ごとの貯炭はどのくらいあるか」という質問にたいしては「営業秘密だから答えられない」と苦しいいいのがれで口をにごす仕末だった。

こういうふうに十分な説明もしないまま「揚炭してくれ」と虫のいい協力だけを要求する会社の態度に、組合側から追及をおこなったが、午後四時四十分に交渉を一時打切り、別室会議をおこなって、午後七時半に再開された交渉の席上、組合はつぎのように態度を明らかにした。

(1)スト中だが、平常通りの作業員（出来高制者）は出勤させ揚炭作業をする。定額給者の一時振職については、支部より明日回答する。

(2)貯炭がひっぱくしているという会社はあくまで関連各社の自社揚炭だからと逃げ口上をいい、あくまで揚炭を強行するとつっぱり、交渉はついに決裂した。

こうして、翌三月一日から会社は九電が傭った臨時工数十名で揚炭をはじめ出し、スト破りの行為に出て来たのである。

組合では、直ちにニュースカーが港頭にかけつけ、本部、支部役員によってマイクを通じて説得が開始された。

「皆さんどうかスト破りの行為はやめて下さい」という、労働者の心に訴える呼びかけに、臨時工の仕事の手も一瞬とまり、やがて一人二人と半数ほどの人が仕事をなげうって帰った。だが、いらいスト破りの揚炭作業は現在もつづけられている。

説得活動つづく

スト破りを大衆動員で阻止しようと思えば容易なことだが、組合では、つぎのような情勢分析からねばり強い説得行動を行っているのである。

○会社の貯炭のひっぱくは予想以上だが、本当の肚は、これを機会に組合を挑発し、紛争や混乱によって、組合の力を分散させようとしている。

○さらに、混乱に乗じてスト破り的な揚炭、荷役を合理化するための仮処分命令を出そうとねらっている。また世論を会社側に引きつけることと、官憲の介入をはかって組合の有利な態勢を崩そうとしている。

○三池の闘いが、総評の春闘の中で敵への反撃にうつる三月末からの決戦態勢を整えているとき三池だけ決戦に入り、敵の戦術におち込むことは避けねばならぬ。

○こんどの問題は、たんなるスト破りでなく、安保改定と結びついた組合ぶつつぶしに通じ「スト権に対する優害」として大きな意味をもつ悪質な敵の攻撃である。

以上のような分析に立って、当面説得行動と適切な大衆動員を加えて柔軟な態度でのぞみ、国鉄、全港湾労組にも働きかけて、救援炭が三池に送られることにも対処することにしている。また、関連各社、各単産の組合員にもスト破りの実態や、われわれの闘いの実情を十分に理解してもらい、春闘の盛り上がりに即応した態勢を固める方針である。

ストライキ破りはやめて下さいと、ニュースカーから呼びかけ説得をつづけた。

家族ぐるみで支援態勢

本所　山田　純

一月二十七日大牟田を出発、総評本部で群馬県配置となり、二十九日現地に着きました。群馬地評は加盟組合員三万八千名で地公労の組合員と、二、三の単産をのぞいて、あとは中小企業の労働者が大半を占めています。県民は三万八千の労働者を除き、農林、石材業を中心に生活を営んでいる状態です。そのような関係で二、三年来進めてきた勤評反対の闘いで農民との間にいろいろな問題をおこした歴史をもっており、その中から農民との提携が非常に論議されて三十四年に労働者、農民、社共両党で組織された民擁連が各中学校ごとに組織されて、安保の闘いが全県民の闘いとしてすすめられています。

一月二十九日から三日間、地評の主催で労農講座がひらかれ、安保批准反対や賃上げを中心とする春闘や、三池闘争が論議され三池の労働者はいまの労働運動の中でどのような位置にあり、この闘いの成果が日本労働運動にどう影響するかについて討議されました。その結果三池闘争支援について次のような具体的内容が決められました。

一、二月一日から一カ月間を三池の労働者を勝たせるための家族ぐるみ支援月間とする。

二、この期間に各職場で集会をひらき、三池闘争の支援を決議し総評が決めた五〇円カンパの具体的実施にあたる。（総評未加盟組合もこれに準じて金額は自主的に決めカンパ体制をつくる）

三、各職場は赤旗の寄せ書きを行う。（実施ずみのところも再度おこなう）また、激励文をおくる。

四、各組合員は家族と話しあい、団結袋をおくる。

などです。

そしてこの決定は各地域、民擁連のすみずみまで徹底していて、各労組の上部機関の指示も下部に滲透していました。私たち三池オルグにたいする各地域の受け入れ体制も非常によく、地公労の組合大単産の労働組合も時間の内外を問わず、集会をもってくれました。また、十四、五名から五十名ほどの中小企業の労働者もそのほとんどが賃金は前率給、しかも八時半から夜七時まで働くというひどい条件の中で、体を休めるわずかの休憩時間を全員参加し三池の闘いの実態を聞いてくれました。夜六時、おそいときは八時ごろからひらかれる雑談会にも若い機織（ハタオリ）の女工さんや、町工場の労働者たちが熱心に参加してくれることからも三池の闘いの本質を理解し、三池の闘いから学び職場で地域で積極的に問題をとりあげて闘いをすすめることを約束してくれました。このことは安保体制をすべての働く日本国民に押しつけている政府、独占資本がいま炭鉱企業の合理化と炭鉱労働者の思想変革に集中攻撃をおこなっているとき、三池闘争を支援することがそのまま自分たちの権利を守る闘いであることを理解していることのあらわれです。このことが一人当り千円の労金預金を割当にちかい三千万円を突破し、さらに百円カンパと今年にはいってからの毎月五十円カンパも半数以上の単産が機関決定をしていることにもあらわれています。

総評・全労・中立という組織のちがいはあっても、労働者であることには変りないことをしりました。要は指導性の問題であり、全労・中立も地区労には加盟し、地評・地平和と民主々義を確立する唯一の道です。最後まで頑張って下さい」と力づよい激励をうけ、クビ切り白紙撤回の勝利の日まで頑張ることを約束して群馬を去り、三月二日同志の待つ三鉱労組へ帰りました。

共感を呼び続行

十日まで地域懇談会

組合ではいよいよ反撃の転機に立ち、各支部では抗議行動を開始しだした。

闘いが全国の労働者に支えられて大きなひろがりをみせてきたのと反対に、敵はあせり出し、何とかして組織を切り崩そうと躍気になってきた。組織分断に全力をかけての狂奔である。

組織の中に第二組合が出来るとどんなに悲惨な状態を示すか、これは、現実に体験をして来た人でなければ、怒りも憎しみも悲しみも切実には感じないだろう。

組合ではそういう点から京の上労組（一名）神鋼労組（二名）紙パ労連興国人絹労組（一名）尼鋼労組（一名）からオルグを迎えて、去る二日から、各地域で懇談会をひらいている。

懇談会では「一万円生活と企業整備が安保とどう結びついているか」「闘いに敗れたらどんな結果になるか」「第二組合が生まれたらどんなに悲惨か」などを中心に、話合っているが、この懇談会は十日までつづけられる。

臼井分会（本所）での懇談会を終った梓島主婦会のオルグは、つぎのように語っていた。

もう三カ所ばかりで話合いをやりましたが、例えば私たちが一万円生活をやって来た体験などを話し合いましたが、みなさんはたんに面白かった、ためになったというだけの受けとめかたではなく、ともに共感して下さったのは、とてもうれしく、また力強く感じました。

美術家が安保反対大会

【KNA】〝安保批准に反対しよう〟のスローガンを掲げた第十三回日本アンデパンダン展が二月十八日から三月一日まで東京都立上野美術家大会が同所講堂で開かれた。二科、職場美術会、芸術大学などの代表約百五十人が集まり日本ジャーナリスト会議山田昭氏の講演をきき、四月に安保反対の美術家の全国大会を開くことをきめて散会した。